

(活動報告)

成人看護学演習の授業展開

— グループワークによるパンフレット作成の学習効果の検討 —

北村真由美¹⁾ 岩崎淳子¹⁾ 田島真智子¹⁾ 森本直樹¹⁾

I. はじめに

看護学教育モデル・コア・カリキュラム(2017)によると、慢性期における看護実践のねらいは、慢性期の疾病を持ちながら生きる人とその家族の思いや生活、治療過程を理解しセルフケアを伴う社会生活を支えることである。

成人看護学実習(慢性期)も、慢性的な経過をたどる対象者とその家族に必要な支援や看護を行うことを実習目標に掲げ、QOLの維持や退院後の生活を予測した援助を行うことを目指している。そのため学生は、実習中対象者とその家族に対し退院後の治療の継続と、行動変容を促すためのアプローチ方法としてパンフレットを用いた援助を行うことがある。

慢性期にある患者の指導効果を得るために患者のヘルスリテラシーを高めることは重要であると言われていいる。堀ら(2018)は、「資料の配布により、患者のヘルスリテラシーは促進され、患者の読解能力に合わせた資料により、患者の疾患に関する知識が向上する可能性がある」と述べ、ナンシーら(1996)は、患者の指導において「患者に適した媒体を用いることで指導効果を高めることが可能であり、繰り返すことで患者の理解をより促すことができる」と述べており、パンフレットによる指導の有効性を示している。

また、学生がパンフレットを作成することについて福岡ら(2017)は、「手作りのパンフレットは学生の主体性や思考力、学生が持つ発想性、創造性を掻き立て、実行する行動力、感動という感性を育てることができる」と述べ、逸見(2006)は、「学生が、対象者を浮かべながらパンフレットに表現するという発見学習・体験学習・主体的学習は、看護への動機づけとなる有効な教育方法といえる」と述べている。

以上のことからパンフレット作成は、主体的に調べることにより学習・実践への意欲がわき、看護への動機づけとなることが考えられる。

グループワークにおけるパンフレット作成の効果について平賀(2016)は、「グループワークにおいて、得意な分野を請け負ったり、ゆだねたり、話し合いながら成果物を完成させ、自身がグループワークに貢献できた感覚が得られると、満足が得られる」と述べている。グループワークによるパンフレット作成を行う過程で学生は、自分の得意分野が発揮できたという満足感により、達成感を得ることが期待できる。さらにグループ内における相談・討議により、様々な意見が抽出されることで患者の個別性を捉えたパンフレット作成につながると考えられる。

以上のことからグループワークにおけるパンフレット作成経験の効果は、臨地実習における看護の動機づけを高め、対象者の生活やQOLの維持・向上を視野に入れた援助の糸口となることが期待できる。

今回、成人看護学演習において、紙上事例を用い看護過程の展開を行った。抽出した看護計画に基づき必要な看護援助におけるパンフレット作成について内容を評価し、今後の指導の改善点を検討したので、ここに報告する。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科(成人看護学)

Ⅱ. 科目の概要と到達目標および展開

1. 科目概要 (成人看護学演習：慢性期)

慢性期の状態にある成人の身体的、心理的、社会的特徴や家族を含めた課題やニーズを理解し、日常生活の課題などについて、紙上の事例を通して看護過程を展開し、課題解決に必要な情報収集、アセスメントと、看護計画の立案などの看護援助を学ぶ。

2. 科目の到達目標 (成人看護学演習：慢性期)

- 1) 慢性期の事例を通して、課題解決に必要な情報を選択できる。
- 2) 慢性期の事例を通して、情報から適切なアセスメントをし、看護問題を立案できる。
- 3) 慢性期の事例を通して、個別性を踏まえた看護計画を立案できる。
- 4) 看護過程を展開する中で、慢性期にある人の生命の維持と日常生活機能の回復、生活の再構築について説明できる。

3. 科目の展開

成人看護学演習の開講は3年生前期15回(5月29日～7月17日)に実施した。学生数は78名、担当教員は4名であった。第2・3回の講義は看護過程の展開として、アセスメントや看護問題の抽出・計画の立案について説明をした。第4回から7回は急性期事例についてアセスメントを中心に看護計画の立案・関連図の作成をグループワークにて行い、発表をした。第8回から11回は慢性期事例の展開について、急性期同様にグループワークを行い、紙上事例を基に問題の抽出の根拠や看護計画を中心に、発表を行った。第12・13回(7月10日第3～4限)では、慢性期看護援助に必要な自己血糖測定が修得できることを目標に、学生が自己血糖測定の演習と、紙上事例を基に退院に必要なパンフレットの作成を行った。(表1)

今回は、糖尿病患者の事例に対する退院指導に必要なパンフレット作成の学習効果の検討を行った。

表1 2018年度成人看護学演習シラバス

回	内 容
1	ガイダンス, 看護過程の展開: 情報の整理と分析について
2	看護過程の展開: アセスメントから看護問題の抽出について
3	看護過程の展開: 関連図・看護計画の立案
4	急性期の事例説明
5～6	急性期の事例展開 (グループワーク)
7	急性期事例の討議
8	慢性期の事例説明
9～10	慢性期の事例展開 (グループワーク)
11	慢性期の事例討議
12～13	慢性期の看護技術演習 (自己血糖測定, 退院指導, 検査, まとめ)
14～15	急性期の看護技術演習 (人工肛門ケア, 周手術期, まとめ)

Ⅲ. 演習方法

1. 紙上事例の概要

40代. 男性. 公務員. 妻・長男と暮らしている. 10年前, 2型糖尿病と診断され, 1回/月に通院し, 食事療法を行っていた. 自覚症状もなく, 仕事による多忙から7年前から通院を自己にて中断した. 今回, 体調不良により受診し, 血液検査の結果, HbA1C: 8.5%, 眼底検査で糖尿病性網膜症と診断された. 血糖

コントロール不良であり、糖尿病教育入院を勧められ、仕事が落ち着いたのを機に入院となる。症状は口渴や倦怠感、手指の痺れ、足底の感覚鈍麻、糖尿病性網膜症による飛蚊症がみられた。入院時「糖尿病について興味がなく、勉強してこなかった。食事にも気をつけてこなかった」「足の痺れはある。足の裏の感覚は鈍いが、歩くのには困っていない」との発言あり。歩行状態は安定している。入院2日目、自己血糖測定の指導を行った。その際「自分の指に針を刺すのは怖い」と穿刺は自己で実施できず。センサーチップへの血液を付けることは手指の痺れがあるため、時間を要したが実施することができた。

2. パンフレット作成演習の段階

- 1) 紙上事例について、看護過程を展開したのち、各自が文献や教科書等を参考に、糖尿病や自己血糖測定に関することについて事前学習を行う。看護計画を立案退院指導に必要なパンフレットを作成するにあたり、内容や構成を事前に各自検討する。
- 2) パンフレット作成にあたり、どの看護問題からの看護計画か、目的やどのような指導効果を期待し作成するのか、作成時にどのような点について留意点したか等の説明をパンフレットの紹介用紙に記載した。(図1)
- 3) 6～7名を1グループとし、12グループに分けグループワークを行った。紙上の糖尿病患者の事例について、退院指導が必要と考えられる看護計画に沿って、パンフレットの作成を行った。
- 4) 作成したパンフレットは展示し、学生・教員間でシールを用いて投票を行い、グループ毎での評価を行った。

看護問題・看護計画	
パンフレット作成の目的 (何を目的とし、どのような効果を期待して作成したか)	
指導対象者	
作成時の留意点	

図1 糖尿病患者への指導パンフレットの紹介

IV. 結果

パンフレットを作成するにあたり、指導の対象が患者のみを対象としたグループは8グループであり、患者と家族を対象としたグループは4グループであった。

パンフレットを用いた指導において期待する効果は、「自己血糖測定ができるようイメージができ、恐怖心・不安を軽減すること」、「自己血糖測定の必要性を理解すること」、「自己血糖測定の手技の獲得のみ」、「退院後の食事・運動療法を継続できること」、「足病変・フットケアの効果と方法を理解すること」が挙げられていた。

立案した看護問題は、「自己血糖測定に対する不安や恐怖心」、「糖尿病合併症の悪化の恐れ」、「糖尿病性神経症に関連した自己血糖測定の困難感」、「糖尿病性足病変の恐れ」が抽出された。

パンフレット作成における留意点は、糖尿病性網膜症の症状に着眼し、「見やすく大きな文字で表示した」、「図や表を用いて見やすくした」や、「血糖測定の結果を記載できるよう工夫した」、「患者が理解しやすいよう分かりやすい言葉で記載した」、「血糖の正常値や目安となるように標準体重に合わせたエネルギー量を記載した」が挙げられていた。

作成したパンフレットを展示し、学生・教員がシールを用いて投票による評価を行った。

V. 考察

今回対象とした事例は、40代男性であった。パンフレットによる指導対象を、患者のみとしたグループは8グループ、患者と妻としたグループが4グループであった。壮年期の役割として、円滑な家庭生活の維持や職業人としての役割を遂行することが挙げられる。対象者は、仕事を優先し、受診を自己にて中断した経緯があり、アドヒアランスを高めるよう関わりをもつことが重要である。パンフレットの指導対象を患者だけでなく、キーパーソンである家族を含め、指導をおこなっていくことが退院後の治療の継続に有効である。そのため教員は、対象者の家族背景も考慮し援助を行うことができるよう指導することが必要である。

パンフレットを作成するにあたり留意した点として、対象者が糖尿病性網膜症による視覚障害があることに着目し、パンフレットという視覚教材を活用できるよう、文字を大きく見やすくし、伝えたいことは色やイラストを加えて強調するなど、対象者の症状に合わせたパンフレットの作成に工夫がなされていた。井畑ら(2013)は、「患者の理解しやすいパンフレットを作成し、指導に活用することで、患者の理解度が上がり手技獲得に有効である」と述べており、学生が、糖尿病性網膜症による症状等の視覚障害の有無や程度について理解し、対象者に合わせた介入方法を考えられている結果であると考えられる。その他、パンフレットに血糖値の基準値を記載したグループ、血糖測定値の記入欄を設けたグループ、エネルギー摂取量の目安を記載したグループがあり、退院後の治療の継続を目的としてパンフレットを参考資料として、活用できる看護援助を考えることができている。

しかし、自己血糖測定に対しての不安や恐怖心があることを看護問題として立案しているにもかかわらず、自己血糖測定の手技・手順のみに焦点を当てパンフレットを作成したグループもあり、不安や恐怖心に対する援助としての的確ではないと考えられる。自己血糖測定時の穿刺への恐怖は、自己血糖測定の手技獲得に支障となり、手順のみを記したパンフレットは根本の解決策となることは難しい。対象者がなぜ自己血糖測定を行う必要があるのか、必要時の対処法、受診を継続する必要性を理解することで治療の継続ができると思われる。教員は、パンフレット作成の際だけでなく、対象者に合わせた目標の設定や必要な情報提供、治療を継続していくための指導内容となるよう、学生へ指導する必要がある。ノールズのアンドラゴジーの概念(2002)では、成人は、発達課題や社会的役割に対処しようと自ら学習する存在とされ、指導する側が主導権を握り一方的な指導を行うのではなく、成人学習者が自らの学習に自己主導性を発揮できることが提起されている。対象者が自ら学習を開始し、学習の計画、実施、評価の責任を引き受けることができるよう条件を整え、導いていくことが対象者の動機づけとなり、治療の継続が可能となると考える。その他に小倉ら(2009)は、「患者指導の目的は、患者が自己の健康問題に気づき、自らの問題に主体的に取り組む意志と技術を持ち、行動を起こすことである」と述べており、対象者が治療に前向きになり、行動変容につなげることができるようパンフレットを作成する上での方向性を学生へ指導していくことが必要である。

成人看護学の臨地実習では、慢性期の患者を受け持ち、疾患を受容する過程から退院に向けて指導を行う場面がある。本演習時期は、臨地実習開始以前であり、パンフレット作成を行う上での目的や看護介入の視点を理解する良い機会であった。平賀(2016)は、「グループワークによるパンフレットの作成は、他のグループとの比較や他のグループからの評価によって、達成感や満足の得られる有効な方法論である」と述べ、井上ら(2014)は、「パンフレットの作成が臨地実習に対し肯定的な準備につながっている」と述べている。パンフレットを展示し、シールを用いた相互評価は、作成したパンフレットが効果的であったか客観的に知ることができ、達成感や満足感につながったと考えられる。学生が興味を持ち、主体的に学ぶ機会となることが学習の意欲となり、患者を理解すること、共に取り組んでいくことの重要性を学び、机上の知識から臨地実習への肯定的な準備につながる演習になったと考える。

VI. 終わりに

本演習は、慢性期にある対象者の退院指導に必要な看護を修得するため、糖尿病事例患者の退院指導に向けたパンフレット作成のグループワークを実施した。対象者の情報や看護問題に合わせて、指導対象、目的、留意点をグループ間で話し合い、それぞれが工夫を凝らしたパンフレットの作成ができた。パンフレット作成の演習は学生が主体的に学び、看護の動機づけとなり、臨地実習に向けての肯定的な準備となると言われている。今後の指導の改善点を検討するためには、学生の理解度の評価や達成感の有無、実習への心構えの変化、そして臨地実習における本演習の効果を評価する必要もある。そして演習の効果を最大限に引き出すために、臨地実習においても、学生が患者のQOLの維持や退院後の生活を予測した援助が行えるよう、本演習を活かした継続的な指導が必要である。

文 献

- 福岡珠美, 西山円 (2017). 成人看護学実践実習での手作りパンフレット作成による自己効力感の関与と教育効果. 太成学院大学紀要. 20, 111-122.
- 平賀元美 (2016). 看護学生のグループでの患者指導パンフレット作成行動について自己採点および満足度からの検討. 千里金蘭大学紀要. 13, 117-124.
- 堀翔太, 藤本修平, 杉田翔, 小林資英, 小向佳奈子 (2018). 患者のヘルスリテラシーに対する介入の効果: ランダム化比較試験のシステマティックレビュー. 日本プライマリ・ケア連合学会誌. 41 (3), 100-109.
- 井畑さやか, 米山はるか, 三村千代美, 茅野郁子, 中西美佐穂 (2013). APDの自己管理へ向けての指導方法の検討—写真付きパンフレットを用いて—. 信州大学医学部附属病院看護研究集録. 41 (1), 160-164.
- 井上理絵, 富岡美佳, 梅崎みどり (2014). 母性看護学演習における妊産褥婦への保健指導課題学習の学習効果. 山陽論叢. 21, 1-10.
- 逸見英枝 (2006). 成人看護学におけるヘルスプロモーション教育での学生の学び—健康教育パンフレット作成を取り入れて—. 新見公立短期大学紀要. 27, 21-32.
- マルカム・ノールズ (1975) / 堀薫夫, 三輪健二監訳 (2002). 成人教育の現代的実践ペタゴジーからアンドラゴジーへ. 東京: 鳳書房.
- 文部科学省 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標—. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/ga_ityou/icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf, 2019-01-11.
- ナンシー I. ホイットマン, バーバラ A. グレアム, キャロル J. グレイト, マーリン・ダンカン・ボイド / 安酸史子監訳 (1996). ナースのための患者教育と健康管理. 東京: 医学書院.
- 小倉能理子, 阿部テル子, 齋藤久美子, 石岡薫, 一戸とも子, 工藤せい子, 西沢義子, 會津桂子, 安杖優子, 小林朱実 (2009). 看護職者の患者指導に対する認識と実施状況. 日本看護研究学会雑誌. 32 (2), 75-83.